

ジャック＝ルイ・ダヴィッド《ブルータス》における「悲劇的プロット」の革新

栗田秀法（跡見学園女子大学）

18世紀後半のフランスにおいて、ジャック＝ルイ・ダヴィッドは歴史画に新たな革新をもたらした。本発表の目的は、その代表作《二人の息子を裁いた後、自邸に戻った最初の執政官ブルータス》(1789)を、従来の「幸福から不幸への逆転」という悲劇的プロットを超える試みとして捉え、未解決の葛藤の持続を画面化する革新性を明らかにすることである。さらにこの革新を、シャフツベリーの修辞学的枠組みと図像伝統に位置づけ、「あわれみとおそれ」の喚起という歴史画の使命との関係で検討する。

《ブルータス》は、反逆を企てた息子を裁いた執政官が、その遺骸を前に沈思する場面を描く。暗がりに沈むブルータスと、光を浴びて嘆く女性群像との対照は、アカデミーが重んじた統一性をあえて破り、鑑賞者の視線を二つの焦点に引き裂く。提示されるのは、父としての愛情と国家的義務という和解不能の対立であり、鑑賞者は単一の教訓に収斂せず、未解決の葛藤そのものに巻き込まれる。歴史家ヘイデン・ホワイトがいう「悲劇的プロット」は従来「逆転」と理解されてきたが、本作はむしろ葛藤の持続を悲劇の核心として提示する。

この革新を理解する鍵は、18世紀初頭のシャフツベリーにある。『ヘラクレスの選択』は1712年に仏訳が公刊され、快楽と美德の間で選択を迫られるヘラクレスを「沈思の姿」として構想した。その際シャフツベリーは、未来の破局を先説法

(prolepsis, anticipation)、過去の帰結を後説法 (analepsis, rappel) として説明し、修辞学のカテゴリーを美学に導入した。こうした議論は同書の版面にも反映され、顎に手を当て沈思するヘラクレス像が広く流布した。ダヴィッドの《ブルータス》における沈思のポーズは、この伝統を想起させ、思想的系譜と図像的継承が交錯する場を形成している。

先行研究では、プトファルケンが統一性の破れを、ベツチュマンが葛藤を、レドベリーが余波 (aftermath) を論じたが、いずれも修辞学的視点には至っていない。本発表はその空白を補い、《ホラティウス兄弟の誓い》(1784) が未来の犠牲を anticipation として、《ブルータス》が処刑後の嘆きと遺骸を rappel として造形化したことを示す。これにより、時間的展開を欠く絵画に「未来」と「過去」を織り込み、観者を未解決の葛藤のただ中に置くことが可能となった。プッサンが《コリオラス》《エステル》で主人公の自己犠牲を描いたのに対し、ダヴィッドは他者の犠牲を前景化し、女性群像の嘆きと対比させることで、より多層的な「あわれみとおそれ」を喚起した。

結論として、《ブルータス》はシャフツベリーに始まる修辞学的時間構造を継承し、先説法と後説法を発展させることで、現代的に言えばフラッシュフォワードとフラッシュバックの可能性を絵画に実現した作品である。本発表はその造形的革新を具体的に明らかにする。